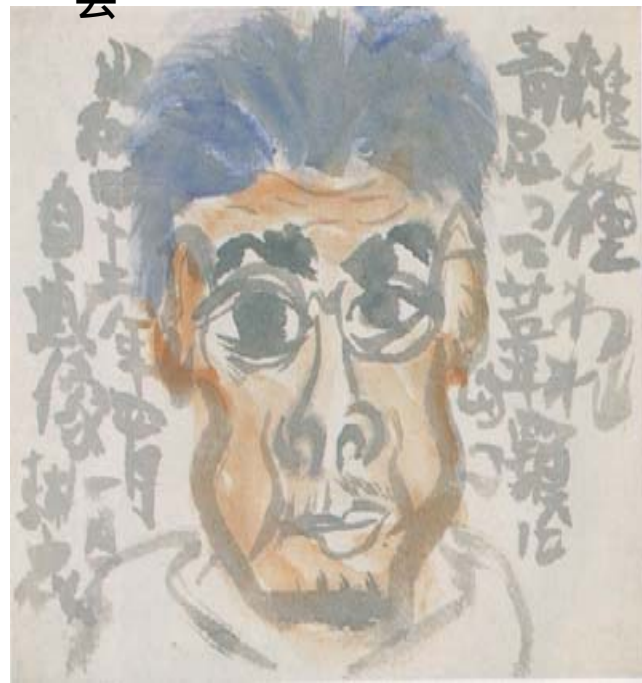


永田耕衣五百句

金子晉篇 永田耕衣の会

一九九九年二月一日



もろこしの毛のあふれ出し祭かな

ひろごりて時雨ごころの海鼠かな

夢の世に葱を作りて寂しさよ

恋猫の恋する猫で押し通す

かたつむりつるめば肉に食ひ入るや



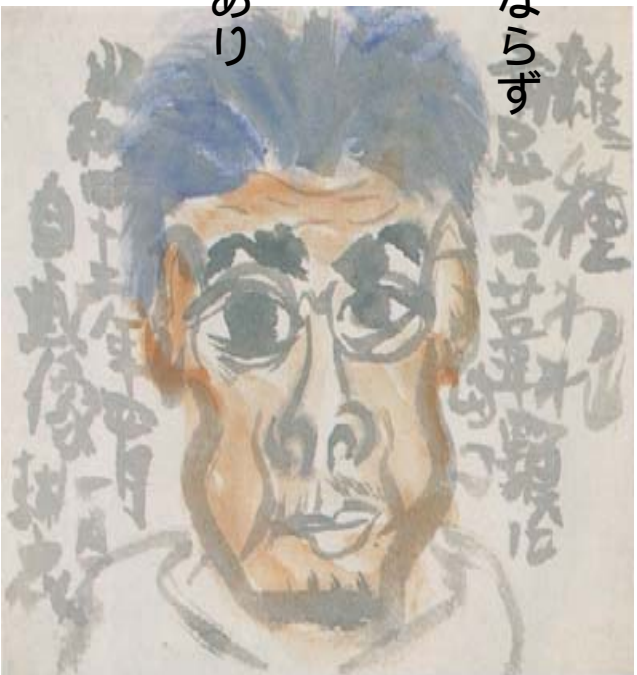
他の蟹を如何ともせず蟹暮るる

朝顔や百たび訪はば母死なむ

行けど行けど一頭の牛に他ならず

天地に無花果ほどの賑はひあり

百姓に今夜も桃の花盛り



田舎にて老母も虻も茶褐色

もう種でなくまつさをに貝割菜

母の死や枝の先まで梅の花

厄介や紅梅の咲き満ちたるは

天心にして脇見せり春の雁



藤房の途中がピクと動きたり

相寄れば明るからむと梅雨雀

近海に鯛睦み居る涅槃像

蝉交む乳白色の部分かな



薄氷のはなればなれの田舎かな

腸の先ず古び行く揚雲雀

死螢に照らしをかける螢かな

泥鰯浮いて鯰も居るといって沈む

夜なれば椿の霊を真似歩く

山中や何れか固き鼻と栗



圧えた鯰と共に笑う身の節々

白桃身嘴のごときを秘めている

晩年を覗いて見よう葱の筒

蛭の池濁るは池の娯楽かな



空蝉にかき附かれたる寂しさよ

足はよき物ぞ春辺よ島山よ

両岸に両手かけたり春の暮

芋食つて今様地獄なつかしや

蠅の貌ほどの霰や潰れ降り

彼の蠅の脚より高き稿を脱す





炎天や十一歩中放屁七つ

此の冬は空どんぶりの懐かしき

しみじみと牛肉は在り寒雀

歳秋の人間の皮埃かな

二度喉を刺しし蟻故七殺す



餅膨れつつ美しき虚空かな

空蟬に肉残り居る山河かな

はるかぜや玄関番の蠅一つ

金魚鉢我等死す事明らかなり

写らむと寄れば茄子次の茄子世かな

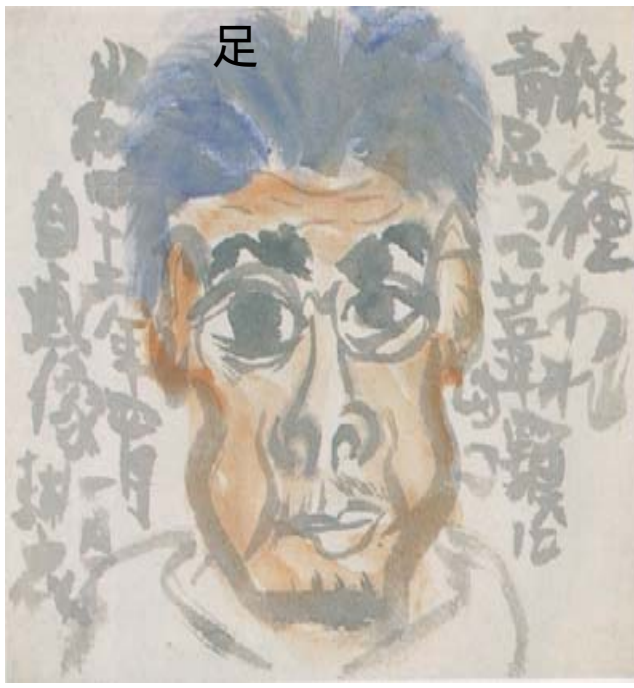


汝が先に死んでしもたかお元日

迄と云い先と云うハテ春の道

大晩春泥ん泥泥どろ泥ん

秋風や吹くだけ吹いて下駄一足



牡丹の夢殻懸けし牡丹かな

柿の蒂みたいな字やる俺（わい）の字や

鯨そばうまい分だけ我は死す

踏切のスベリヒユまで歩かれへん

一步をば痛感したり芹なづな

夏鹿の面を横に歩きけり

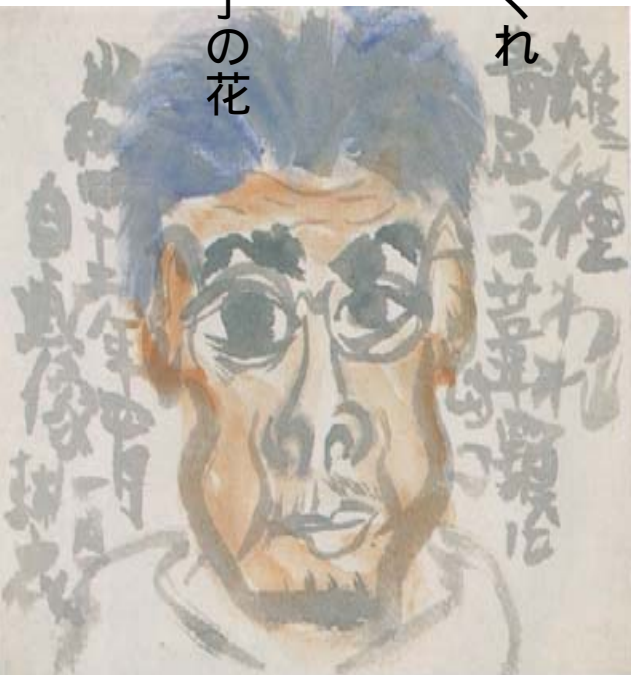


豆の芽のつす色指して行く我ぞ

老人やみみず両断され共に跳ね

寂しくて道のつながる年のくれ

自分でも要らぬ葉が出来茄子の花



吹きぬけは腹にわるけれ春の風

福寿草くしゃみが腰に応えたぞ

つちくれを拾わんとしき春の暮

終り